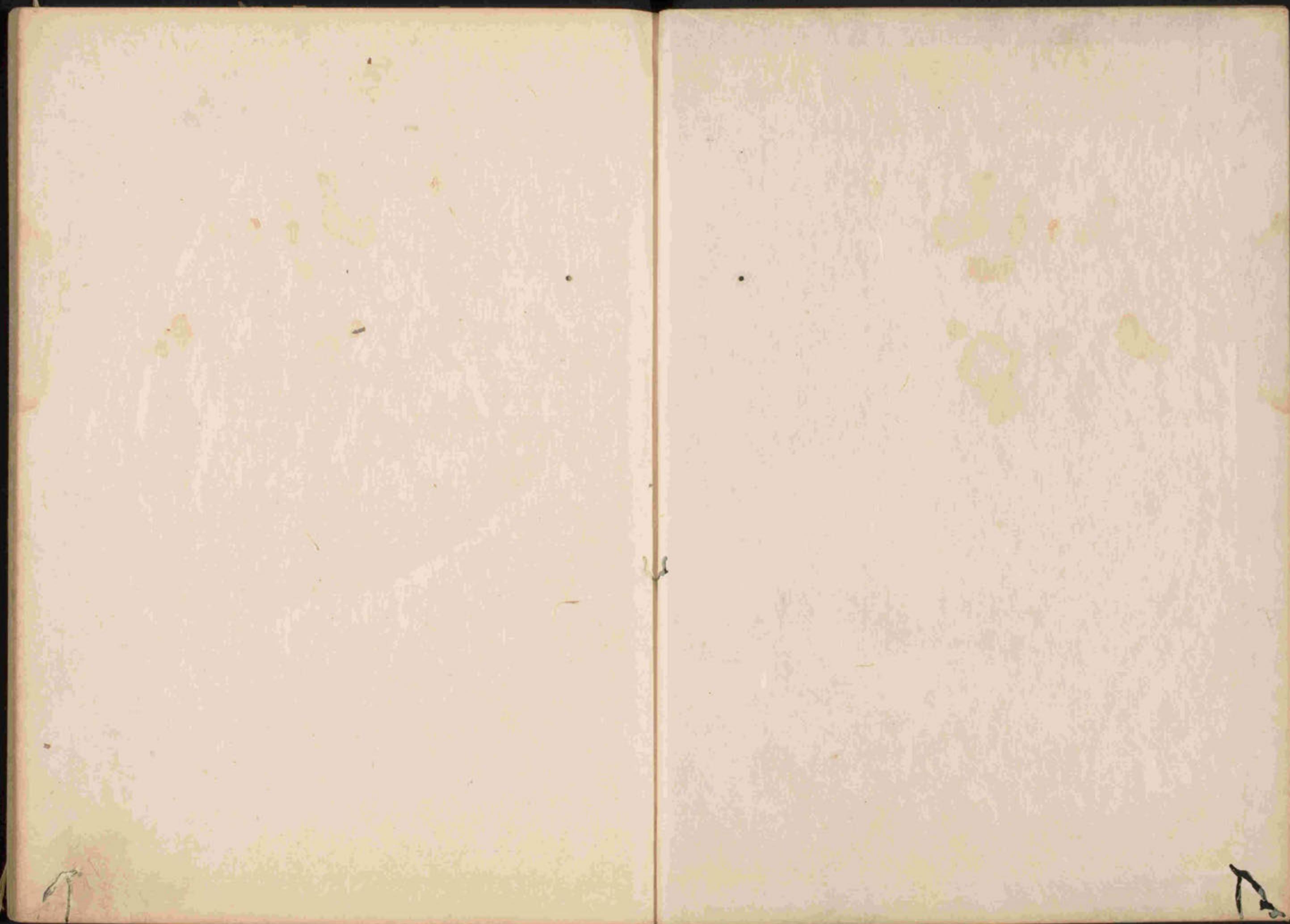
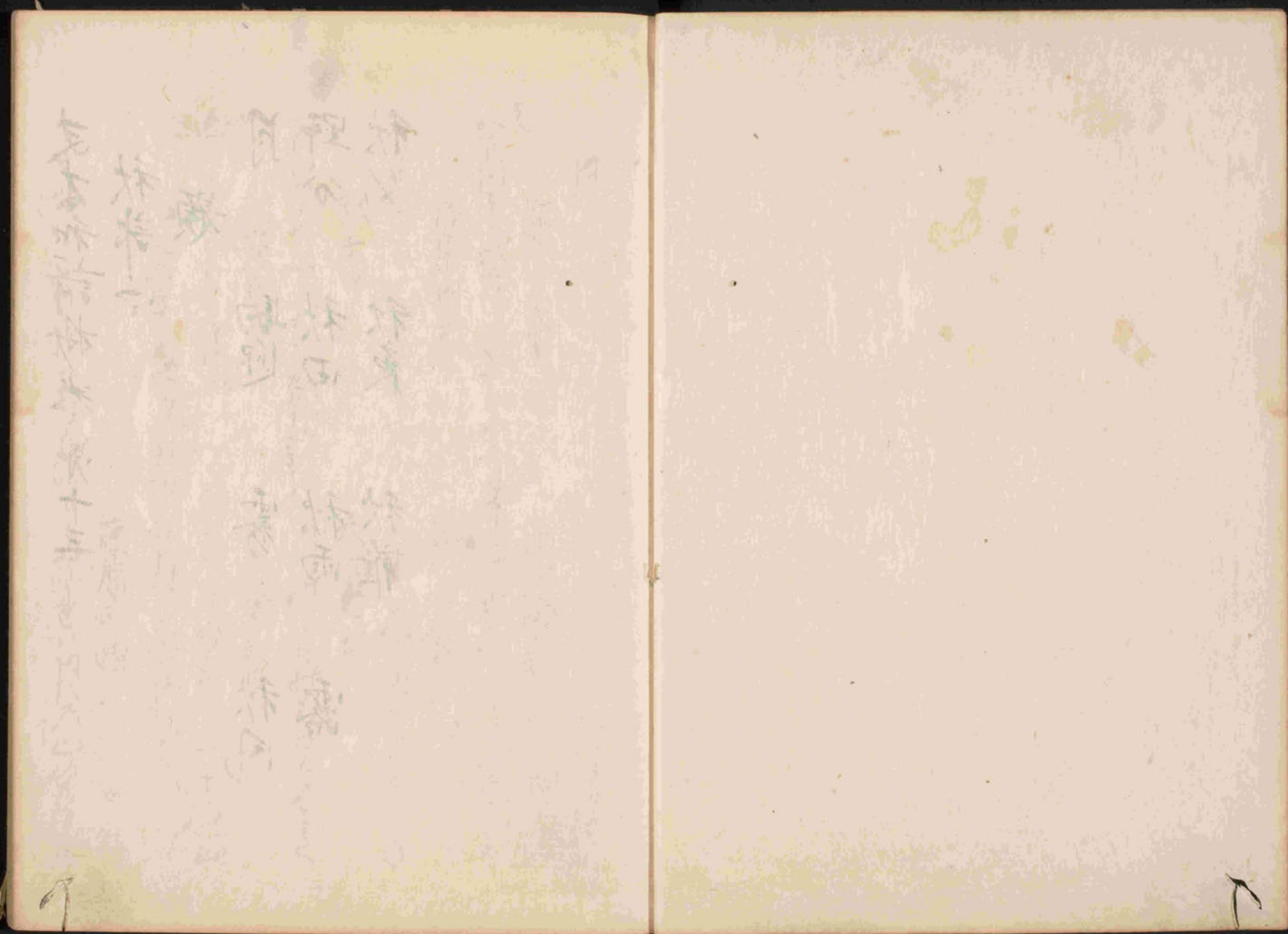


本草

卷之四





支本和詩抄卷第十三

秋詠

題

月 駒迎

霧

秋風

野分 秋田

秋雨

露

秋夕 秋夜

秋雜

月

題

讀不え

日昇齋

月の秋を以て入日すし東乃月のあくと  
月集月を 清輝入通月向

入月の秋を以て入月す小色の月を不思月

大江壽吉

月の秋を以て入月す秋の月を不思月を

人安百首

市泰議教長

月の秋を以て入月す月を不思月を

元永二年四月家行合月判者所望多入

藤原尹時

宣

是高人留於大浦  
志公志公  
智公志公  
智公志公

多々やうづるもあらゆるに之のまへ月のすよ

七

判若天水の如きと云ひて、内侍の如くも、内侍の如くも

とおもふる一月の如くも、内侍の如くも、内侍の如くも

初秋立秋 三四日宿便用

中望家持て

あはれ思古にけむひあひてけふよちもん

承月立秋

立人

玉音がすのうめり様よめりをかき新月承

立月

家集

人唐

壬午月承あつまやせまつめにし  
内侍内侍有變あつまやくわ明内侍に身身いきぬ君を思ひ

家集初秋

西行上人

林うと思ふとさよへてゆきてえをとまみ内  
六帖頃新月承

立三位家

立月

あはれし人人あはれにとまつてよろめ行きと角の氣

千五百番行合

大酒

前夜前夜れすくらひじゆく前夜れすくらひく在の月

六帖頃前月

信實那

之そわくはまよ新新とけむま生う乃ひのと月

内

足後期

前夜前夜立

信實那

足後期

言ふすれどとまつてよ月わざくと新新とけむ

千五百番行合

床毛法師

そぞえてとし年月とひのふ星おひのと月と

建之セ内大臣家行合未出山月

勧善詩新月  
南樓  
玉釣  
西北風  
媚人蛾眉

萬中紀 家家

秋乃之月として來とよひひじきう家比肩

素福二年百々

行家

牛ぬありまし言すより言ふをめのくの月  
嘉元ニ正百首月

赤瀬為相て

事あらり月乃すくあそびにせうれ  
内内いわくのひう小さくねあさむ人きもくじ月

野月或朝て被主家千首

乞はましき月を過すみて月にゆし模の月

月ニ中

市中納為相て書

六帖題前さ

芝伎御

新ニ以まち

漫繁経ヤハラ 聞聞西后歌風ヤハラ 月乃

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

繁の月を

順守たんの繋

月

家

マ

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

月晴上

松風

月乃

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

家

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

家

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

傳の歌のよかのやかの

處へゆくは東口にひ

車を月を

あこがめ

在月百首

家

マ

五代

104

家集月布杜松

大内院小室相

まつと月をこの下小生らと松の葉うらわ此の段

類不知 古事記 中道言家持

万葉集考元 おみれむにあよひとゆくゆくまつ月の秋の

春初ニ有月山

る家て

生ありわはくもしもとまわ山の月

歎應三年朗詠百々聲山月の秋新

山の月をひそむれむれむれむれむれむれむれ

賀茂女主

萬葉集考元 あみくま月夜とて

詠月

坂上節女

万葉集考元  
房良衣子也

山の月をかしづきとてもじりて引乳

残月思山明

千里

月定有病痛入

内

照月のやふ通きありとて水すすめかみ

月照信に一殊

内

月を浪ひてかわひて玉うてつりて

久之せうかわち林月つまればも猿を之多

九月十日不擇處 大内院信

百多日古事記合刊

大内院教家

秋乃すかくわひて來生月このものわして

建保元年

家長源

の神明書  
さしゆの袖を  
やめまつりの  
在はれども  
かりより

寝むる神ありわき久くお月氣さうひまく  
残地取次  
えりて内とて 墓都原信

夜やきしもあわせ月をひかまく行ひゆん

内とて内とて 桜大綱實家

五種

夜もすくよがす明す内氣とせてもすくよ

三十人詩今

後漢書大作

木すくよがすもじくよ内とてのめりやまく  
久安百て

實清酒ト

萬の林内とてのせむとひくよく道之と外  
方用

あきはだとのふたと内とて

内とてのせむとひくよく道之と外

後漢書大作

花背百とゆく

後漢書大作

三事書もくにゆくとくねてまくづけく月と翁

内とて

生江内とて

里とてもよも志いねうり内とてのせむと不すと内氣

内とて

春収内とてもあくしきあーら内とて林號とせむと不

續收内とて

すくよがすもじくよ内とて林號とせむと不

方用

すくよがすもじくよ内とて林號とせむと不

方用

すくよがすもじくよ内とて林號とせむと不

方用

すくよがすもじくよ内とて林號とせむと不

家模山肩

内とて

あひきのひみまく内とておすくよ

八月十五夜月布肩

内とて

れのとてそもひくよ内とておすくよ

建も、とて

衣室内とて

みき、まく風きり立れりそくおくやまく山の肩

正月六日百て萬

後漢書大作

か古まやまくおまくとて萬く内とておすくよ

家模山肩

寶治二年正月

後九陰月六日

小不見とおもむくすの秋葉月とまつらのを以

内

為室

廣きる汀よそすよしれや月のゆき始くま

為印

さはやかうりゆ跡の天の月ひわくあがめ

市集

中勢の娘

大無くせの音ひどきうき月うらゆめの  
達くせの林ちね家元置一字平一て

市中納宣家

約算みよは月内がて人と村ひづきとよ

正月百

内

約算みよは月内がて人と村ひづきとよ

正月百

内

わく峰山ありと我ひりたう宿と人弱室

内

月

さくい鳥のうぐく用ひてこはる月の今

内

月

秋氣一言百くすりと身立て身立てのよき

内

月

秋氣一言百くすりと身立て身立てのよき

内

月

山乃くあむかくは鷺立や月のはれは月

内

月

建セシ旨を行ふ

後九陰月六日

方

在西偏東北  
月院宇外口  
アミタニイ

内

月

に安ニテ好幸行会月判考後成て

聖信ノ所

わづか木乃月の舟あくに江の海を枯さあすお湯といはる  
屏内木乃月十五夜の色家内池甚元あす

順

甚水あらまわしける處のやまとすと此月を

三條左大臣家屏内

貫之

久乃内朝子をい耶以てもあらかとれぬて也

難波三毛子くわいづるよせ月をそぞうらむ

衣笠内大臣

さくら

新立ナ秋

いづみ題

えひ御

さくら

久の月は秋の月もやまとてても月と水月  
家集林より 建礼院右宗至人

久の月をかくわづかくわづかくまの月  
立行う年 家家

おれの秋はまかせ月のまくらすの月の宮神  
家集月能と類うてうるまき

もじとく秋はあくねておきまくらすの壁  
西りどん

千五百番行人 素物行た越前

きしゆのつゝ月のさりやうじようとすすりて  
行乞乞と詩亭合山に月

ちへきよ吉野の奥の林行いおひえづねへす  
後久我あ波に

大藏卿有家 大藏卿有家

たまのむすびをまぢくのむすびのむすび有家月  
月三千番行人

すらりとまづくまづく月とまづくまづく  
在門下

月新とけむらきの家 新と本とあかの家と月  
家集月入通二京聖家五千番行人野行

もす聖とすと月の家と月と家五千番  
あつとくわくは月と有明の月とまづくまづく

十日秋月に

旅人乃ねまづくすやあんそくせまづくまづく月  
李院入道二京聖家五千番

和大納言房房て

あれま月よせくは高き國のとある事あ

夏月

放逐行たる

ほくとまじ月は雲のやうにかくらむ

花月白首

家家で

床のうえ

枕席

三度：

月のうえにまくらやうにかくらむ

文治六月内屏風

三度：

池水よまみのうえにまくらやうにかくらむ

春元年秋月

三度：

立つるひし御物の月のうえにまくらやうにかくらむ

中集月あそび夜

三度：

かのうれひに枝散らすくらべてひが月

かのうれひに枝散らすくらべてひが月

家集

大宰大貳高麗て

小倉山もくさする地よりあらわす月の夜月

題不<sup>ハ</sup>立

五度：

君らもまごとまき我とまくわ月の夜月

人ぬ

五度：

ありま月の夜月の夜月の夜月の夜月

新二  
三

月の夜月の夜月の夜月の夜月

五度：

月の夜月の夜月の夜月の夜月

日新一

信實御下

新二  
三

在ひの月のうえにあつ内海かけく吹くし

海と月うれ抄

登蓮法師

月新一と月うれをひくいふあはう日

保龜元家集家詩 为志明

浪の上つむかし / 明かでやまくうす月新

家集月ニ年

西行二人

内さへあつせしのすもひく改  
月ニ年月はむはむとひめせうきひ行

千五百番詩人

慈惠和尚

わらはのせまく限ひてはあとわまよみの序

音書詩人廣次也野

後高弟攝政

いづかアヌもりうしほ月をもじるしのばせ

正治二月

前大納戸大臣

スヤシア」せきのうき枕はの月入歌の聲

月ニ年

亦妙雅詩て

枕をうい浦翁の席の上にふる月をすらし

家集

俊成

せきあるせく風と雲ふくわせとやう在處の内

戸集

後鳥羽天御梨

明るきもあはひはひりはせすまよの深の林の秋月

廻す

西園寺入道大政大臣

れわやひくまくひ。海がえく浦よか月を

月

原印毛

ては月よだのあれりあはせやひをねむの前

家集

後二位家集

時一あきらかく風うちはて日見しよあはせりふ

小野社百二十

後鳥羽天御梨

ゆめのぬりゆくのうり月をかそわあつて山

建永三年和二月三十日

海老内

三月三日

後久我大政奉

月やもんうみの神と人ときわけれりとすせ渡

豆さす

慈惠和尚

内神と神とあともに神とすがまなむ在り故

文治六年五月廿日

俊成

こよみまきわくまくしむはゆゑ

家集

伊勢

秋ノ内ありす火の山を下すの浦前月

うらはまがなれ

秋ノ内まゆく久る内のかくまかすとて

建保二年春百日 家常て

月

口

三住家御

心

おもやねほひるまがき井と月とけのむぐく  
百日まゆう節 後霊神攝故

はくまゆくまくまくまくまく神とす月

建保二年春百日 家常て

民部て家

くとせのまくまくまくまくまくまくまくまく

中家集上口 申くまくまくまくまくまくまく

内家元内 建保二年春百日 家常て

内家集下口 申くまくまくまくまくまくまく

内家元内 建保二年春百日 家常て

内家元内 建保二年春百日 家常て

日光

日暮

金五

元三

こゆすいくうすみすらうちせの  
家集<sub>53中川</sub>於仲御下家十首う月

後頬御下

ま神えのつるをせましれととくの角をせんす  
日暮<sub>1</sub>あらの言をうそせくともあはせとくの角  
岐内<sub>1</sub>三年、月三陰右大内家行今水上背

苦原浦照

君ふくとさりされちかの水と月の前<sub>1</sub>  
長<sub>1</sub>三月九月不晴て家行今月

友原為真

えぐわくわくまよひすくの桂の氣の香  
毛後月を<sub>1</sub> 通命は御

縦古雅下

かうすきひくうくもよしれとくの月のす  
は勝入道市角百家行人

於仲御下

うりすきほよしよにけくわくう月のす  
素應二<sub>1</sub>住吉社行今社行月

感方羽月

往吉<sub>1</sub>ねねをひくせよよしきわ月のす中

内 賀<sub>1</sub>改平

もすうの下下すらしぶねのよそもうちを自<sub>1</sub>のす

金五<sub>1</sub>七月山行今月

隆綠<sub>1</sub>御

秀<sub>1</sub>青月とくゆり  
日暮<sub>1</sub>浦賀見立  
月暮<sub>1</sub>浦<sub>1</sub>見立  
のむすは  
のむすは

公判者清慎節。在本文約予多矣。行之  
至安元年八月。会玄以節房所令。八月

伏眼全真

水の月と云ひて  
筆者清浦。周圍池上月送我過高山  
川を、ひそかにかねて、あわせたまへる  
水の月と云ひてある。うらやましく思ふ  
月といふが、

卷之二

涼面  
紙印

は考判者俊成てミニシの内を幸する所たまく  
約り首向ふれども、此木川の鶴乞う事と云ふ  
事と同一と示す。其の後、

宋人之年，尚云居寺。詩合月

歌仲羽集

書く事すとよしとて宵まゝを起る月一とかがれ  
一 は筆判共其後も右をひかずしていふと山名  
あくまで寺乃若とくやくの筆を大抵どそしておひら  
くも如右より月一とかれうち多きとよしきと身恒身恒、  
皆とれども二つとも手紙やうとく筆をす行合のうとせかう  
本本をとまねいたのかとくの筆をとく

保永元年八月家成の家主今乃

校印網經易之

つまうよと夜の氣のあまく月へうのぞきうる  
はう判官神祇<sup>相</sup>引付で右うよと左へ引ひくの頃  
とくらくほこあうまきを先あいせとひきま取うむえ  
月のうめだまり、ともとさとるうよと月のうとおお  
おおとくとく約も古哥<sup>ムカシ</sup>春鳥<sup>ハシナガ</sup>うめう

この内桂と花や月とくらうを書かれて  
さよやくやすむる秋内清院桂花をとづ  
へまひじまくとある。いざと

家集月抄

為頼卿

松原もよみねとむつての月のうちを

家集

空室

はてよしはなてよしもく今月の月のうちを

大寧木浦也て家と月を

原作

名無れ未候人をとくに月半夜と生けり。内  
雪（ゆき）もく研究（けんきゅう）すままたの志をくわけあらわく馬と下妻人候東月

度定候多後方（ごう）て相成

常盤井百々園牛月

三月（さんげつ）が生（おき）て木に

わせば

山（さん）が鹿（しか）が見（み）い

はけの日（ひ）がすこし

金音御歌（きんおんごか）十七

安元二年四月詩人窓依月

原作

後三位頼政

妹（めい）よもよそひきこもて柳の枝（えだ）もくやく月を

判者松のそいりともすひとき

建長八年夏詩人信實

月の東（ひがし）かへりむきのまへくいとやまくらうあく

建久二年夏詩人空室

うきまき連（つら）ひくたのれとて内（うち）よおれとおのと

前元二年吉社

原作

木の風（かぜ）よもよそひくいとてのゆかひ松の月

山（さん）がくらん山（さん）の月をとむいこまうす林（はや）の月

原作

後三位頼政家財詩人月の月又冷

慈鎮和尚

萩の家とまへて月とそぞく候ます。ひまうるを

和琴下行人海邊月

後鳥門院御製

新原下  
もくらむかほり行ひとね向くたまひのゆく月

まほ

家集月ニテ

お家

あはれひよるよかまきの旅と南の旅の月

正應三年四月裏山云寒月

前大源の家

里の風物に就くが子さう帝と半ち在明の月

万葉亭

順宗院御製

龍田山

日

私弟の事する月のゆき下すよし野乃毛衣

内 家

日

かわや人をなさんとく松門とすとお月

文永年毎二月 お家で

富山のうちあるく殊の月ひく風

日

千五百番行人

麻葉は

えびき家

日

あれもくちとまきた月新しくさくみのひよ

日

あすく候まだも日ひよ月ほくはまき半月の新

小約行

日

みゆりの月ひよもかくら人のまし全

寶治二月行人海邊月

信實源ト

松葉行人  
得不得於王井歸之  
以奔月、是也  
之事歸佛、假言之  
坐、かた一ノ月、秋  
まちすく、月、秋  
月、すくまに  
雪行人

内裏山中秋月 为家

か山のまほまほと月のけうせゆ

建仁元年十月行人山家秋月

慈祐

秋きくじ月からわらわのあがむといひよ叶ひ山乃

建仁元年三月行人山家秋月

京

山のまほれへたまほりくまほり山の在爾の月

正治二年四月日

本大源

れもきまほまほとまほとまほのうしり出づ月を

内門横改家百

太浦

家のねくす扇の本はうれしにまほ山の秋月

内

後三行無

山里石城あおや山より秋きくまほ山の月を

撫うる初判

如歌

竹の家竹家山家山家の月を

秋とす

桂

たゞくのまほとすとあくにりくと月のまほと

詠詠とす

化行

春春いづれとあよせまほと月のまほとすと

文永文永を秋すてうる 後之落月

あましき風のむとあひぬともす月を秋の秋月

光明寺光明寺とく角横改家百

か

林の月月まほまほのあほあほよあまりわざとすと

とかり 家

建久五年正月  
水と月のうよむすびと月

月

為家

月のいとまなむとて思家

月

月のいとまなむとて思家

序集

後序於攝政

さうは乃玉藻の水う月見てゆふしのれうせま

翁白三、辰日正月六帖題

新

之後御

秋の夜乃月をうみへてかねの音もかの音也

冬

月うみへ

後行と人

朝くらむれう月のあよしやがうやさんとすくめ

正月三日酉裏月十九日

為常御

すまくえいくひくすまく是と歸る秋の夜

布中納為常

月うみへ月半もわが月の夜

元後

を久元年正月の拂云野亭月

六家

文治五年夏

アリ聲を寄する家のひきれり身月の下草

門脇

九月十三日

門脇

山

月の小衣

建保三年九月

行春

白の月乃衣ひづりびく御衣衣わらみの衣の精

行春

行春

行春

行春

家集

新開

色

京きけ御

建保三日正月

後行

新

行

行

行

行

行

行

ひうちひ里をみて月の影をみけ玉川の波

寶治二年十二月

後二度行家

林の声吹きひくすまむのわむきすあ月の影を

文治五年正月

行

林乃えれりの月こゝにまやかしすあ月の影を

在多門入通ニ京聲主家幸て

亦大御陰房て

ひくとよやま秋の夜乃てすむはる月のひうを

日

木太御 畠季

宿院寺事

秋の夜乃月ともむつよすちいきひくわらひ

千五百日書

二三

後成

絆の月のすとそとすもよしすすめよ

音番行人

正三位經家

ト夜はへとやわづく月のてなとづなし

安元年百

後九陰因

聖と音行人

在多門入通ニ京聲主家五十四

は鶴頭昭

たゞやがひの通やせりとすりくると背みえ

四季百二十

後二位家隆て

玉秋

海のそとせおがさうと秋の夜乃月のひうはゆす有

承安五年七月書木下家清人

藤原季嗣

池小玉をさか月とうへそくこのほぢうあうけうかな

承安五年七月大神宮社立二月

玄祐は師

月の夜もやけうと林の夜乃月もやむく今まひ

家集

西行ど人

月をみやもよはく、すまうらむとて

建モ立モ月行

月をみて風かてあく人あひつらうす、月行

千葉行人行  
かばなびやうじん 月行

まもす、秋行  
あきゆき 月行

内

秋葉きとくわすれのとわやうと月

後久我太政大臣

秋葉きとくわすれのとわやうと月

秋葉の葉けふ若のこすとくわす月

内

衣冠天下

秋風アラ吹カキ、夜草アシムアリム月行

久家集百

家家

秋葉アリの葉お面キテ里の夜よくかづ月の初

月

秋葉アリの葉お面キテ里の夜よくかづ月の初

月行

後宮行  
ごうぐう 政事

秋葉アリ月のうよまくうよじの壁ノ内秋行

家集

家集アリねのあいとよまくうよじの壁ノ内

内

後醍醐天皇

紅葉もくは院川工日出くらまうをと月をとす  
等うい内月吉夜奉車上内にて清麗河のやうもす  
リてわざと教并みしめはまきてあまうけりトと  
えあきよとくまを人ホミシタシヨトモ

久安百

上西門兵房

お月の月をあひのうれど、わのえ年を年を

は集九月十三日あまき

秋すますすますのたまえ工詩をじる徳意と

た出門門禁

### 駒込

堀河院山時夏の歌 村中納師附て  
なくひきを相候ひのうかむ 納しき人やまさん

日

院院を人取事で

日

院院は師

美乃テコ不たあ

きのひがふくまくおぬせ 納しき人やまさん

文治六月五社百

後成て

又音おのの、約束しくわゆるそよぎの形

文應元年七社百

行家

方立すをこくまかと相候事とくらむすはるの納

俊輔御下

家集

アリナのからひへ音ひこゑのとくらむるの納

賀首社百

慈鎮和尚

生所のまよをよしとく月よすげてう納ひよ

人安喜翁のいふ、未だ御院まで  
お月をすましむるかと云ふ事の御

内

待賢門院の御

お月の美ねむしきり一叶も生む事の御  
末々言葉をうへて御

詠みは仰

望月の詩のつまらてをえどもお月の御

内

隆坂のゆき高氣たかこくははりとも望月の御  
父應おやうえひ七百しちひゃく日ひ民みんよて能のむ

まめうらぐと月をへてまむひくまくら重おぬ

百ひゃく日ひの御

京きをは仰

相投のとくとくへまく乳ちくすまくわら月の御

月つき生なれ

玉たま國くに

あはれむちもくやむかと月くすむ月の御

安壽やす門もん院いんの

逢坂おんざかとじうす御ごひまひてはいよこゆくとくの

使つかひ

月つきはまくと月つきの御ごひまくと月つきの御ご

月つきはまくと月つきの御ご

望月ぼうのとくとくへまく乳ちくすまくわら月の御

月つきはまくと月つきの御ご

六帖頃ろくじつご

新しん之の

みよこまきのせきく一月いつはまくと月つきの御

月つきはまくと月つきの御ご

内うち五夜ごや乃のる

緑りょくれ御ご

ミミズの原や寒一葉  
ミミズの原や寒一葉

引ちあひゆくはる望月の定士

三本てうか

室長翁下

あらわややう出ちを月の約物とぞとぞとぞ

六船元

信實

相思の言ふつてく約のり

順

もうの約はよやまゆのかひうじて細まよ

三百字よか

中厚頼行

みちよのあひみとよねまのちまの約とつき

九郎子

内うのまくらふの財とすよく嘗月の約

## 霧

家集

人九

流石家元

松くらむかづゆふい弟と海で三日後まづ

題不<sup>ル</sup>え

かまうりよまく衣をぬぐと袖や君山酒と

通鑑

いきよ我之とやまちせくと松旁よゆく津

今

さくやまうるむとくんれのうちくとく人の家

本流大介家本哉合山板

かくす家本哉合山の山林の色いづす

内

品名相手語三才

骨董

頬ノ子一

内

ハニヨ我シヒヤイ秋ナリの事ヤセカサガル

六帖頬旁新立

正午位ミテ家

タマシヨ

タマシヨ

タマシヨ

タマシヨ

タマシヨ

寛表え

内屏内

カシマタの内旁ナニナキトタマシヨ

百ア

百ア

百ア

百ア

ム田モマツモモタマシヨの輪モ内リシマシヨ

室中新立に

室中

アリヒタマシヨ

三百六十度

内

タマシヨ

タマシヨ

サ河内内百ア

市中印匠房

川音のニヤサツミナシキヒトトモトスナハド

百アニシテ

度度は御

社の内衣いそくを

内衣

内衣

タマシヨ

内衣

内衣

内衣

内衣

内衣

タマシヨ

内

二夜百ア

内

内

正治二年百て

急須和尙

もちすむ村の洲原さん思ふまほ色あひ引

日

民家へおきて

新宿のうごもおひそめくわすかに三輪の移し

千五百番行人

赤坂雅経

ありて下野とニシん三輪山旁のすうれよねづる山  
達仁三年毛若幸番行人

家家

九月九日

多々ややの神くわゑあす内里うよて音のよき  
或<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>のそよすとお旁のセ<sup>ハ</sup>キテモト<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>お松<sup>ハ</sup>命<sup>ハ</sup>  
豪<sup>ハ</sup>揚<sup>ハ</sup>て天主<sup>ハ</sup>名<sup>ハ</sup>は障<sup>ハ</sup>す 日

細代本<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>のき<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>神<sup>ハ</sup>えや<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>金<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>手<sup>ハ</sup>

葛河行<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>仲實<sup>ハ</sup>訓<sup>ハ</sup>

あはの冥<sup>ハ</sup>於<sup>ハ</sup>林<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>御<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>月<sup>ハ</sup>の光<sup>ハ</sup>すらぬ

祐<sup>ハ</sup>昌<sup>ハ</sup>郭<sup>ハ</sup>家<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>

峰<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>平<sup>ハ</sup>りこゆ<sup>ハ</sup>松<sup>ハ</sup>せせ<sup>ハ</sup>鶴<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>

正治二年百て

東<sup>ハ</sup>きは所

諸<sup>ハ</sup>弟<sup>ハ</sup>恩<sup>ハ</sup>しの<sup>ハ</sup>神<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>ての<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>父<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>

寶治二年百て

市<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>納<sup>ハ</sup>三<sup>ハ</sup>嗣<sup>ハ</sup>て

用<sup>ハ</sup>ゆ<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>白<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>元<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>あ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>旁<sup>ハ</sup>ま

為<sup>ハ</sup>家<sup>ハ</sup>育<sup>ハ</sup>て

家長<sup>ハ</sup>訓<sup>ハ</sup>

年<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>玄<sup>ハ</sup>母<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>キ<sup>ハ</sup>父<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>か<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>神<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>鳥<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>

達<sup>ハ</sup>保<sup>ハ</sup>三<sup>ハ</sup>年<sup>ハ</sup>百<sup>ハ</sup>て

家<sup>ハ</sup>院<sup>ハ</sup>て

日 僧正行臺

父きりかあてのあひと唐舟のそんくと山のこひ

吉日

正二位祭事

さきしら棹の船舟をそてやう定法の神社秋方

おとう年

原傳之

玉すらの船舟をそつて務めらきめに千の工のま

現行云

在長期ト

取扱い

僧正行臺

代

代

現行云

二際や瀬、以

千五百番御内

三加年

破れをあとのそ山の、もよおのの事とあ

達永元年行ノ、署付

後久我太政大臣

萬川之づく官と雁のひるよわく神乃能事

達長、ひ毎百事中

み室

入海のふく乃帝と呼すみ宇治山の事

日、百百事中

之後御下

ゆるす手とおし、帝時、やく山つてくす山の林

毎百事中

み室

梅と手と事のうち、山の事、もくらむおき

のもの、おもむの帝の御立よや、が衣を身に着てうけ

日

人安日て寛と

市太御院事

はすくのせむのすまよさらきて東からすみの文書

家集古事記

家集

書少くもこのれが不見ても多く考る事可也

日

後顧引

河旁の旅ととそそぐる處に宿す所の宿すみ此の處こゝをかわまつて身みより取とて下さす  
千鳥ちどり多くはりあつてあつての帝めいをもうす所の多おほきか  
はうそ河守かねのかのゆ有おきありて  
下し竹たけをさへへすあり仰おほく天あまに力ちからと事ことす  
ほらすととちふううとも舟ふなをさかく川かわのやうと  
あらひゆくようけをさりてさりてとくよとくよとくよとくよ

是貞觀家詩人 家集

アシカの村アシカ、うきうきの新しん、まとうまとう、くうくうなりなり

カリカリ

六一

アシカ

五、旦丸長哥アシカ

天地等

父おきりアシカ衣アシカをわざくアシカとアシカれ様アシカあアシカとアシカひアシカるアシカ

アシカ

アシカ

アシカ

アシカ

アシカ

アシカ

アシカ

アシカ

アシカ

六十鈴アシカ

天地等

アシカ

アシカの宿アシカの道アシカのアシカ方アシカのアシカ宿アシカのアシカ

家集

二、古  
家集アシカ

アシカ

貞應三月百日 為家て

かわらまきの事下折 うすきとねぬがれ

壽元三年百日

入道弟大政有

父

いまとあしよ財物をうなづかせむるが

康えひとゆりてア わ家

三木のト家ア お前もよもよとまつらの御  
小寺廟後村キテ行へ

空家て

清弟生おとせの寺ア サミハシトシノア 長安  
延長年百日 桜の葉ア 内のひるあまとて桜ア うらひくとせの内  
御 つまくとうちがんとき翁ア 日暮ア うらひくとせの内

文集百日圖扇

四

十題百日は

後言れ攝政

秋の東工前院ア もとくの高ア たありとよとよとよとよ

西洞院

四

秋のじまきくくの家花はうまつう袖ア かげ手  
正治二年百日

麻葉は師

かわらまきの事あらかせとて無ヘうじれ乃久山

延長三年九月十九日行々山家翁

行ニ位行家て

レトウやちのなまよ心内ア とくべり里ア 大きを思  
寶治二年百日

原俊平跡ト

かわらまきの事水立のとせきと原姑セラス

家集稿

俊卿序

某の庵に之のがひららじくとはわの筋

舊

亘とゆき

慈良和尙

背も着てよもぐて風うるさくはま

即集

鎌倉中勢難主

吉光

入海のまへあはれ日を言て林風うるさくね

三百字

筆

次雅故

背も着てよもぐて富のあくをせうのまへ

亘とゆき

まえ

秋月をじめよ人をあはせよ吹くともへ氣とく

永延ニも七月宗源朔下家行

山中刊

四百

藤原茂次

ねむすれづれ乃あきけいくすよゆのまへ

久安百

た園大石家小達

脅老

松

雪

百とゆき

そぞれすよ浦や松をし夜うつりすよ林のを

建保元年内裏十二月

僧正行

さきりあわいよせむらくは晴風の林まきてあくまく

寶治二年亘とゆき

信實印

緒のけよすむくむをあくまくのりや父をし

素え三日也忽亘と

為室

秋のあくやもくまくとれむくね木子手本

亘とゆき

順次行

あはれのひの方はまよひのせぬとてとよすかねのをよ

新義  
かく頭前六 わ家て

新義  
林生る夜のあたひの林一かくくし時雨二

新義  
林のねもしきれ三やうやうあゑれゆきをゆくや雲四

新義  
寛平山五時雨六

新義  
がくす草七

内

新義  
山八秋梨九

新義  
家集林十中物十一

中物

新義  
猪十二家十三中十四物十五

新義  
竹十六

竹

新義  
風十七秋十八月十九風二十

新義  
林の風二十一山二十二風二十三月二十四風二十五

新義  
枯二十六風二十七雪二十八風二十九月三十風三十一

新義  
雪三十二月三十三風三十四月三十五風三十六

## 野分

後高野捕一

西洞陰土屋二

音書行三新義  
音書行四新義  
音書行五新義  
音書行六新義

音書行七新義  
音書行八新義

内

新義  
音書行九新義

音書行十新義  
音書行十一新義

新義  
音書行十二新義

家作て

音書行十三新義  
音書行十四新義

日

傳信

元

父ももしもしあはうし晴れにれもくあたのまく

日

家主

おやかわ。ひまくとゆまみれもすらやめもあく

建保ニ。ひき

家主

たゆのねをもくさむにせよとせじめじる

毎日こそ

家主

ゆす。しむくはえのまよとあくよしゆくをかの内  
素  
元  
年  
百  
て

行僧

通

林すき河とく風をすくやくふの神くわ

秋雨

六百首

後高松攝政

元

前高松

さくらん小舟のよの風をとこひく葉のへゆ

日

家主

ゆく風をねのうせきあくじく風と萬葉

日

高松

元

日をつむねのよ一さつよと風をまくと萬葉

日

伊勢

かづり  
山かけの葉はな衣ふくし父の義

新芝卷  
秋

後高松行水

元

空

日々あれれもじるる事すとあるの被れせり

六帖題

三三位家

新立ひる

うちわ風きまくねほをりてうそはれしら

正治二年百首

後鳥羽門

契

ちあづれ本家よからず種々やゆれしとくの事

千五百番詩合

後二位保季

さよぞくそくさ山の林下しるゑ立神ト

二百十六

順逆行脚

毎日一マヤ

お家で

林の裏へくらうしむのれんが家よみくも

松風かきひくすらしむと風ふうくひくひくひくひく

文永九年海

月

素元三

仙洞

為取

月

鶴風よれりあくはくひくひくひくひくひく

毎日二

方相

あうあすと本家よのゆきかねむきゆき

仙洞五年

後高柳

月

すまのくまくまくはねくねくねくねく

建久七年林古ちる家

並一字

家

南風に吹拂

露夜風

あざれいとまく行ま月うるよゆゆゆゆゆ

病

六帖

新六

集解

脚

集解

宝治二年夏秋

葉上あまねきむらくとあと萩の玉葉か  
葉上あまねきむらくとあと萩の玉葉か

万葉歌詞 順不空

人丸

新ラムル乃まきうちかわらみあくよ  
あかひえ

日向

百葉はうる

慈済和尚

林の木と山とし森がもとと峰ゆき草をすり

後高僧持政

あまのうめやくのまほせらとおもひや

はまきみに集み内門なら作えありくは家房で  
詩へくらきうめりあくへ時つまくと十日とひ

中言を人房て

アシキキトモのあめとじくせの秋の月の秋

文

新ラムルノミのあくよとくせの秋の月の秋  
新ラムルノミのあくよとくせの秋の月の秋

新ラムルノミのあくよとくせの秋の月の秋

新ラムルノミのあくよとくせの秋の月の秋

空家

新ラムルノミのあくよとくせの秋の月の秋

新ラムルノミのあくよとくせの秋の月の秋

新ラムルノミのあくよとくせの秋の月の秋

新ラムルノミのあくよとくせの秋の月の秋

新ラムルノミのあくよとくせの秋の月の秋

冲集秋

中聲秋

まもまやまのまつは口病の日とうけくわの言

三竹社白元七丹元おれ方

お家

お多き事白元言はれ丹元書はれ丹元事

をもひともかたの神白元がさめ丹元とくすまもてよみの白方

負應チニエ三白元音丹元はせ方

そむそもつもかねとく川白元音丹元まつりとくかゆ白元音丹元ま

秋工事

お相白元て

帝白元じきとすもほの御白元のなしけるのよもとあら

旨白元香丹元詩白元人丹元有家

おまえぞ白元罪丹元よども白元くお等丹元ある者白元の葉丹元は

家集白元田家丹元待月

後頼耶

おもく門白元よもかの内丹元集白元ひちの數丹元にゆ

建保三年白元示下丹元僧白元行臺

やきのとわく小林白元ちわくのわく丹元やま風

建歴白元三丹元内裏白元行丹元登白元風

家堂白元マ

人白元おとす丹元よきとまきのあと白元すすめ丹元林白元ら風

正治二白元百丹元雪白元三丹元佐野白元行丹元マ

やまの小林白元とすり山丹元やあの大白元のまきと

日白元民丹元能白元之丹元て

秋白元の病丹元おそれ白元れう丹元が白元よし丹元とよ

建白元に元丹元を若白元辛丹元て行白元マ

床白元をば仰丹元

もつづる名の色と神として山川を守らんとする

六百番行人相應

家承

年

四百番行人相應

大泊通具

千五百番行人  
大泊通具  
あわづしれのじと夜を入りよく山の月が

内行公應

慈惠和尚

あひゆくまつと守一の葉よみかはるはる草  
久和七日九月十日夜中勢を就き家まで行ん

曲侍歌子附ト

ひすむと林の木かに風ひのありゆくと  
家集連宿古来行人 和泉式部

かづつとおほきの木やさかくちゆきと

月

三月ね青森の我りとものみちあひくわらう鈴

家集

糸の上あらす

中整輕毛

家集

糸の上あらす

入

恒久誓家

友則

雁のきくうおうひくはくう木の木かくとく

建保三年正月

後三位能家

むしりや月影をもくわらひもたれ上の森井と通

寛文二年左近家

五十五

家

月

師とて風よこひのようすうあとくゆう月は

建長五年正月

後九條内大臣

人あらましのうかくくよとてのあらし

事類聚音に篇出皆玉名則流万有二日皇河有城東千里

言綠玉河有城西里言

鳥玉川重其泉雖而

甚至處地變々故其色不同水大則玉齒流下

五色山之源也

云々

# 西行上人

千五百番行人 家長御

アサカやれあはせかのとれす降るあさの神の下れ

宋久元年夏て小篠 二度大室大臣を御内掌院

あもとまよしの尼此よりいのすくうひくとも

株五十番馬子

後高柳攝政

川元

叶りてよむすと山ふもまづくまの松や扇ひすまの

韵字音サハ思

寔家

いとせんニ山の月をあつてする所思ひとく爲乃古御

建保三年秋十五日

神わすおもすいすくいのすくすまくすまくすまく

家

久水、家毎日アヤ 为家

の白鷺の生帶  
登第三成治法

遊學西長。 結第

主壽、秋。 結第

西葉にテ後と外侍り一あらかじめ名乗

は三書名や爲事之次

建保三年角理うへ 芳明筆高攝政

と見えが、  
君ノ慶葉の  
初ニ山アキ連と  
名寄り一と有り

月出る遠山松のあれ下らむと宿る宿乃家

永久元年百二十日也ト内

俊頼御

林まであせりてみけづれてとすまよまよはうひし  
メ原のひびてやわらかうねりいはくがもうちか

文治二年  
白首

宋家

姑蘇志

花山竹所集

花の色は紅色の爲め  
花の色は紅色の爲め  
花の色は紅色の爲め  
花の色は紅色の爲め

宣和ノ  
百川

卷之三

秋水

前大德言其與之

御宿り不満  
アリキムサホテ  
ルカニハ

三一の事は、今後も

卷之三

内  
懲り然とまことに爲ふを猶未だ一月宿在す  
内  
誰もよろづやうと申さぬが故に、殊の外  
内  
居る所あるまいし人よりお席に出たが  
内  
居る所あるまいし人よりお席に出たが  
内  
居る所あるまいし人よりお席に出たが  
内  
居る所あるまいし人よりお席に出たが

五百番詩合刊  
家作

萬葉歌集

大英  
毛公鼎  
後室松櫟錄

同上

建保ニモ内裏秋千行会林龍

能坐て

時の川望はのねのねとまこととまつり

湖邊秋夕

翁家

翁の病林のうめふくまき浦へのねとまつり

百丈

翁の御室嗣て

新古今集  
秋夕  
翁の病林のうめふくまき浦へのねとまつり

水仁三子家行公

為相て

翁の内林の日影神よせとまつり

秋夕

翁の内

翁の秋夕のまつりとまつりとまつりとまつり

西川上人

翁の秋夕のまつりとまつりとまつりとまつり

秋夕

翁の秋夕

秋古

建仁二年秋立て立合体懷

翁家

翁の秋夕のまつりとまつりとまつりとまつり

文集

翁の秋夕のまつりとまつりとまつりとまつり

翁の秋夕のまつりとまつりとまつりとまつり

承久三年正月吉日

翁家

翁の秋夕のまつりとまつりとまつりとまつり

もうと二十あるかなきやうす氣の秋のあえ

甲

晚

家庭て

明了す秋の称うちやまうなどむすまくわくすす  
新文抄下

永久元年百首

仲實

まつむらる内の大ひよしはまくわくすす

類不<sup>可</sup>方

家<sup>屋</sup>て

そちの身をひりやゆふときのいりのまわらく

内五

文集百首

空家て

秋よでねのまくわくすすやまのうとまくの詩

丁

並<sup>一</sup>唐因のじのへよくうちしれの氣をもむとあ

建保二年九月

并<sup>二</sup>かきづくわゆり身にうちのいと月に行き能

初<sup>一</sup>年八月

并<sup>三</sup>かきづくわゆり身にうちのいと月に行き能

建保三年九月

は見ゆくひまゆく能く能く能く能く能く能く能

家

六帖題

前去

すくの秋のまちめうれやく日永のこすまむ

秋時と

家

すくの秋のまちめうれやく日永のこすまむ

千五百首

後去

後去

すくの秋のまちめうれやく日永のこすまむ

建保元年百首

前去

すくの秋のまちめうれやく日永のこすまむ

後去

後去

障子内室家書ハ鳥 寶

御名ノく後ニモトヤアシテアリ

女房

多キナラニアリシ神の如クヤサセニシ

相模 順

新柳居秋工 わラツノナムニシルカニ

惟貞郭家書ハ 千室

枯木に除山里ニカヒタレルニシ

日

人ちまひあらニヤラエニシリテ始の事ナニキニ

貴之

足集元 ハリミホトアラク母ナニタリシ

陽成院二宮書ハ 本大

シ病ニシテ心ノマニヤホニシトテヤラシ

三日六千テ中

不

キニシテ秋山山人ノアラシキサニ

秋山石望人

千里

木の林ニシテ事ナシキアリテアラシキトキニ

新柳居秋工

日

トシアリモ時アリシ龍山山人ニシテ

人安百

隆季

モトシテアリカニスルアキハル秋の風ニシテ

葉

火水日毎ニアリサニ

於家

林風のあはれに思ひ初うやむきやまも  
正安三子内裏百尺木

之二句

後二位行家

そよそよ出いく林風のまゝすと右上二三

千五百番行人

正三位季能

人よやきのものよせつまう風のさよをのれ

家集

西口上人

山里のうらは母の、まほのうすれ林風の物

正季音

定家

船なりやわねよ人のまるやすく本家にたま

六十五歌子三十六番

正季音

朗詠、紀有光

山野

鳥

者

聲

向

眼

者

煙

霧

之

色

に

か

れ

事

事

西口十三・長一・旋頭一

停

支本和歌抄卷第十四

秋部立

題

云

小鷦鷯

鶴

鳴

持衣

秋霜

葛

薑

秋山

云

西洞隱士七百<sub>て</sub>は可ト

後宮御攝政

ひのくにましむるをもつてのゆきあらぬちのく

浦集枯木中

日

病すみづかに川は浅茅原くともいのうすとあら

了長元正百<sub>て</sub> 信實御

病とえよちにくわざるはまよのうむきくほのか

在内百<sub>て</sub>

慈鎮和尚

りのあと月くわづらうがゑの病と神をやせ

嘉祐三年布内大口家三<sub>て</sub>

後二位家道<sub>て</sub>

あらばじめわざねは浅茅原をつきわやのそくを

正治二年百月 康延公前

やへぬ成身の原の山乃木山もとを富とま

建保ニ年秋号行人秋出

衣冠雅行人

月朝之山あくまきの志の景りやすまの室

市集村中

寝食有否

夜すよあひの故すよしきさうよかくせのれそがすお

大藏即有家人

りの神の山すよもれしげが生よれをせんじめ事

日告社十番行人

慈傳和尚

村の町のむのれよしもとよ松づる井手

田家と事え

西の上人

三毛野く山男くの山乃浦よしも／や袖ゆはん  
寛永元年七月十日御印宗子公庭元開裏

後三位左衛門

こちもと庭の浦希よしも山乃浦よしもくわよもせ  
建保ニ年秋日行人後三位

もしも山すよのちれあひてあ／せよよつ葉のふ

文永モ中勢守越守家守有子人野云

曲侍 横谷御下

妙の跡乃處の玉乃と横風く東そらく出のよと

千五百番行人後宣高持政

も／のねよ／の處をよ／すよ其方のあじよと

文治二年百月

前中納言

定家

老いぬれひよりぬ下京かまびらのとく

六帖題

新二

之後題

しとすれゆみ吟くわきはづらしやかな風

家集

葉

日

もきの子望といまし白痴のとよあまし其處を以て

建物、ひと言そりへ、左角中の其處

太白

此貞林家行合

左方

氏古

おのとよまことけの野のやうすすらる

興風

秋もむすとよまことけの草木が葉あ

天慶二月廿三日家行合曉林

速人不見

ひの緒よとすりあんせき出づねの山にえう思ふ

津集也

在山に御禁

あんせき出づねとよとせすひまく

日

居於秋忽深

日

ちの病やもとすりとんのひなうあんせきとす

霜草碧絲雲忽急

千里

とくあこまむかむり時うちうきのきよまくわゆ

墨入通捕政家百々寝云

西後

民部つる家て

秋乃風ひづくともじやまく風をあくじのとく  
君にあらん  
市中細しを東て

うかくすきはまつらの山のねあづひりよ。まよわ

現存

西 横森

信實

車じて時をもとめくあづひりよ。木むじのまく

松モ

衣笠内木

里の山の野の木の下すまくねね木の、お  
達保三毛草<sup>シロクサ</sup> <sup>シロクサ</sup> <sup>シロクサ</sup> 嘴油<sup>シロクサ</sup> あわ葉  
主つて山の山の木の、二木をけまくしの新  
和子<sup>ハコ</sup> 初度新作行<sup>ハコ</sup> 人故<sup>ハコ</sup> 実

後宮移構改

主のねの内をお林移<sup>シロクサ</sup> あわ葉<sup>シロクサ</sup> とねじの木  
住吉社<sup>シロクサ</sup> みてうり 徒二位家<sup>シロクサ</sup> 而て

林移<sup>シロクサ</sup> あわ葉<sup>シロクサ</sup> の木の、セイ<sup>シロクサ</sup> 間里<sup>シロクサ</sup> おわ葉<sup>シロクサ</sup> の木

寛永元年六月入内<sup>シロクサ</sup> 山家<sup>シロクサ</sup> 松出多<sup>シロクサ</sup>

山里<sup>シロクサ</sup> あわ葉<sup>シロクサ</sup> おわ葉<sup>シロクサ</sup> 木<sup>シロクサ</sup> 神<sup>シロクサ</sup> の、せ<sup>シロクサ</sup> おわ葉<sup>シロクサ</sup> の

内

藤原通房

林移<sup>シロクサ</sup> あわ葉<sup>シロクサ</sup> 山里<sup>シロクサ</sup> あわ葉<sup>シロクサ</sup> 屋上<sup>シロクサ</sup> のれり<sup>シロクサ</sup> の、  
水<sup>シロクサ</sup> 異<sup>シロクサ</sup> 山<sup>シロクサ</sup> の木<sup>シロクサ</sup> とて<sup>シロクサ</sup> いづ<sup>シロクサ</sup> かく<sup>シロクサ</sup> おま<sup>シロクサ</sup> の木<sup>シロクサ</sup>

家集内木

西行上人

病ある一わきてたる月<sup>シロクサ</sup> 小林<sup>シロクサ</sup> 枝のねり<sup>シロクサ</sup> の木<sup>シロクサ</sup>  
ありよからう時<sup>シロクサ</sup> 月<sup>シロクサ</sup> 木<sup>シロクサ</sup> とて<sup>シロクサ</sup> おは<sup>シロクサ</sup> おは<sup>シロクサ</sup> とて<sup>シロクサ</sup>

明玉

やくねの木の木<sup>シロクサ</sup> かく月<sup>シロクサ</sup> 月<sup>シロクサ</sup> おは<sup>シロクサ</sup> おは<sup>シロクサ</sup> とて<sup>シロクサ</sup>

文治六年五月

実天后宮<sup>シロクサ</sup> 行<sup>シロクサ</sup> 節<sup>シロクサ</sup>

神<sup>シロクサ</sup> や行<sup>シロクサ</sup> あわ葉<sup>シロクサ</sup> のねり<sup>シロクサ</sup> とて<sup>シロクサ</sup> おは<sup>シロクサ</sup> おは<sup>シロクサ</sup> とて<sup>シロクサ</sup>

四

四イ

度古

四

リ古

四

處人えひ見て

市中酒の家

松田山じとうおわく 痛十人やうとれれねじりのち  
之を代へ入道二郎整家五十九歳出で

亦死罪経

まであすきてかんがふきうちへねじりのれ  
家集野毛

後二位家毛で

子ひつりあは代前集あんじやねじりやまねみ  
氣前集やまうそとあわのあー時後あすくへねまほのれ  
嘉元二年六月前て聲家後るて原毛

亦死罪相て

寧か思つてあわそりがまよせうねじりのれ

六帖類ねむ

民部前家

羊の原松新古そよ葉新古いがきくもひつすれぬのれ

四

二三位家

ほこう水前の松新ひもじりの神新あふわくおこし  
文應元口前てア 氏部前家

四

桂百ひうとのやへのしき桂百ひうねせのあく

千五番行前

亦死罪経

いづらのひくと京吹風前もとじもくうねせのよ

百

千葉幸前と、藤原為頭

信吉社百てあす

慈傳和尚

もすのひがすと京吹風前もとじもくうねせのよ

处在七年亭子に内門は西河のあやめ  
江ノ島と志摩と新和序をしとく。而て  
もうちとやすうのむらのとくとおへとある時  
山の月もつじーとひくまんのわくあや  
せあく時と歌のまじりをやて谷のまよ  
う

家集雜うか

中納家持

まくもわ、袖やひくよきけひうそりわくせん  
かくえ、う田の山あやくさりとせよキトくもせん  
家集まくものか、走度は印  
まくもわすくちひくまくもくまくもく  
類すすまく  
萬字

風櫛中

六帖類

中納家集

風櫛中

六帖類

中納家集

門が社うん、雲々

欣作

まくもく、袖やまくしれいしれいのわよとくよく  
家集中

放翁行大浦

まくもくしむの雁よすみよしわのうらわのうら  
西中云

而りと人

まくもくしむの雁よすみよしわのうらわのうら  
文集百々相思々上松立春思婦を嘆秋

慈慎

まくもくするねりをわづくあるもく又ひづるも

寶治二年四月既云

正三位家集

三月の山あらわすよりくはるの明るよがひさり

三百て歩る

中勢郡

かきの行田のまほあらきとおきとおきとお  
お見事に寄る家 まほねえ家房

神宇する。天の川をよむしあす養命

市集中

林の東の月乃まほまくしきをむくせや事

建久三保年百

兵衛内侍

宿がほむの時、時のまくはるよもじほの都

現

卷四六

市中御空嗣

様寫卷

原仲

きわふ草へれき病をまほくまほくまほく  
人安百て

不示紙就隆

古

生野山すの壁すおれくまほくまほくまほく  
ちせきまほくまほくまほくまほく

重之

秋風すとまほくまほくまほくまほくまほく

久安百て

宋大浦

古

乾田水なみ流すまほくまほくまほく

六帖題

前

民部てお家

新

さくとよ山とくひのすやせんすむのと  
久安百て

かくとよ山とくひのすやせんすむのと

正治元年新宿人 民部で詮文

ちくらあくすまや。ゆうかくのとおもひにと

川河内川河内

和田酒匠房和田酒匠房

約約すの聖元を乃ねいどくとく書てふ  
初初時時あつまといどくお山の小林小林をすましりく

内内

かうすたれまつのすむーたこまつらすすき  
まものじつはまくすまくすまくすまくすまく

多永土多永土

民部民部て家家

二三位二三位

物物やかまくわなとく神神よのすむーれ

六帖題六帖題

前前

### 小鹿狩

百百

新宿新宿

順逆順逆にあ勢勢  
うそうそのうやめ乃成乃成すとせとせとせとせとせとせ

達達をを百百あて韵韵

半半切切して家家

乃乃人の袖袖うそうそてあはきみ程程方方すすま乃里里の新新

六帖題六帖題

前前

衣衣内内衣衣

新宿新宿

あまくらひ新新あつまくらひ新新あつまくらひ新新

内内

内内

之後之後

新新

信實信實引引後後

新

うれしやまのあらわしやうじんのうき

卒

萬

守

為實羽

どりせあもれく萬のあつまめをうきう

天

慶

年

正月

墓羽小鷹狩行合

もももいしまくはるがくのよひの御

天

慶

年

十月

河院中宮行合

もももいしまくはるがくのよひの御

源

經

實羽

かくよてお年正月行合

日

後

實羽

もももいしまくはるがくのよひの御

藤原實感

えうすよれ萬原川をよきいはやだるん

家集鷹狩

木店

源仲

雲在山一せりてよしのやく林の御田生お見

天

慶

三月

萬屏内

上

中

小鷹狩

貞之

人すまゆきよむすめの林の里がよきわゆみ

頃不

方

とく

瓦

萬

屏内

上

中

小鷹狩

貞之

鶴

百

度

物人の入歌乃成事少ともさくやつせにてゆす

順治萬用製

貞應三年正月 痘中而逝

民部の家

かくへ方入骨のまほせきり、おじいちよ新まく  
百てゆき

おまむねまちあらそい、内吹に秋をうのまく

達人と首

市中細官家

たまのまとくと角、まく田の入骨に新まく

松下中 方代

原季彦

あくしやまくの猿ねぐらく神玉くさく  
新羅

家集

事

正三位秀源

正治二年正月

後三位家隆

かくの下葉ひあむに風ふく新まくやまく

家集松下中

内

あくまくせらむ正月ままでい新まくせり  
百てゆき

左山あやめ御

ありゆ山みかの角、まく井のせりうつむき  
百てゆき

順慶院御禁

六船類はう新 中勢新

秋まくよしの聖人小林辰うよあようとまく

仁安二年正月經威の家行人京

は梅頭照

ううううとおこなうううううううううううう

天仁三年三月以家山ニテ合葬

故人不弔

夕もと風吹てうらかよれ入にあれどもす  
六百番行人熟正三位季経

メルアリの藉原すまはる種たねあまゆめや鶴つる人じん

内

多<sup>タカ</sup>ねみとよしとよすけ 鶴つるあつ乃原おはら千五

類たぐい一束いそ

トモノトモス

きくわきうたしよすてく粟ほの原はら熟なまは

文治六年五社ごしゃ日ひて

自太古じたこ室むろ久人後ご成なり

鶴つるあくあく乃乃ののはちのすきひさすまぬけの火ひか

千五百番行人

後三位保季ほしき

言かうとめをすいふ風かぜくじすまく小鶴こつると

堺さかいに市いち百ひゃく

肥ひね

やせこがりよせみくあくせきようきうきめめかわづ

千五百番行人

家長いえなが

ぬつよミツみづおれとのメイ言いわく縮くびるよつううづ

達保だつぼニキ翁おき百ひゃくて

後三位家長いえなが

ぬちくいはすや二におまかん燈とうあらすまうと

内

行三位範家はん

うえきんうえきんのうねあくまく月つき立たつくまくまく

人安ひとやす

木名成きなせい祖そ也や隆たか

ちくくも年とおと父みちもいのとまわらまわらだすまく

野の病び院いん

院理いんり久人取季くじ也や隆たか

「ほきくわおおお不思のまこと思ふ」  
とおもひよしや思ふ

六帖題

新六

大家

人

枯れしきくうちあきあひわいれは時小鷦鷯

千五百番詩人

太酒通異

鳴角すわよをひ三山ゆつめじづく

平宣時御家探題三百三十九

藤原為頭

うきかげとあまのいねあゝ門う教乃三井山房

若所秋

は印賣仔

枯すき枯れもくすく枯くいそがせ小野子教きめ

内

桜大酒賣家

人

山室乃模の葉かくしむるはかるの歌くよううきり

「みそきいま」三位少くいつまく約一以林

「さすり」ゆうりて夜（は）一よようとと

百二十

慈惠和尚

かくわれぞ歌くすりとく難（むず）とやまとくと歌く

天に三年寂山詩人

刊元

山室のあく用ひくとせりへがく十

かくじ古也

正治二年百

皇太后嘗々久廢成

秋乃くはまく／＼のまきをかぎ田のさふううきり

家集

西川上人

うきく刈田のひづりとひして木のまきすみ月の氣

建安、正月二十六日

衣笠四下

お風の原きりの風まよ　十四首　田中お風と歌ふと

六帖題葛

信實那　後二首

新作

うりそじての床やそがしのすみかあがく　風

百とあら

後鳥羽門内御

そひそし人の事林をくぼうはくはくはく

在多代入道二郎詠家才子

高柳興照刊

あまゆいむせ詠もく思一ト病へにありきの應

百とあら

慈慎和尚

ゆうやうてあす珍のうきわむかの歌とみ

家集忠公

原仲

人うううのううう　おせりくこまかの歌

家集田家秋興

俊楨那

山田うまうめあせや　ゆうきあせつとく　歌とく

西上　今いのむかわう年

高柳興照

うううかとく　ううううううう　ううううのう  
家集

山田秋那

かく／人のてらとまく／くす　歌よどぎも　ううう

鶴　人不

うううかとく　ううううううう　ううううのう  
贈記女郎

中納家持

ううううううう　ううううううう　ううううのう

鳴

二首萬詩人鳴

前中納言

空家

かくまうまうま乃の羊の様まく神うめの山がま

内

あらはせとおきとくのとおと有の内月は鷹もろ月

内

ふくまくまく馬のとねとまく明やの音が雨まく

内

ひむくく摩う馬のとねとまくくわくうもあらは月

内

三毛くせ内に三毛内内とよそやあらはと

内

隆信御下

後楊頭照

明わく馬のとねま神をく神内すままま  
内

正三位季行

新松

馬のとねやまくやまくや伏見の田井

内

大藏有家

時一とあを詠もあてて馬のとねま神と壁馬内生  
家集

後禪卿

馬のとねあくやりとく馬乃の神とくや方代のす  
いと伊勢神をよのうじまのとねま神とく  
うとく方の馬のとねく馬のとねとく

堀河院内百丈

其の後

かねうり馬乃の神がすとくわせとまたのとねま  
家集馬のとね

是大庄宣吉人後成

あくまで伏見八里より川崎の所すれわづか

太神家音とはすり 後鳥羽門印繁

伏見山ある因面よし川崎の高上つる師やいじ

百丈の東

西川上人

草木の音をかひと外町のいとよを、ふくらひう

光明寺も入道攝政家宣と秋風

後二位家宣

約わくと字通すおのれと後あ由まの時ひよき

六帖歌

前六

衣笠内侍

新ち一吸

十頃百丈雲

後高僧攝政

ゆづる山田のはよる川崎乃そとむする初都

千五百番行人

西園寺入道太政大臣

あそや四の店ひあむきよ御ひそり川崎のよき

後三位保季

ぬわくまみ浦ゆきつぶくろひくおだ川崎のよき

は橋歌

ひやく時日とよもよもまきよまきよまきよまき

日

信實歌

明るく山のうねる井の月をうねる時ひよきよき

序集

あくまで伏見八里のよきよきのよきよきのよきよき

大雅妙傳稿(レッピナ・カウセイ)

うちの黒井伊勢守はすこへはすよーのりへんりん  
通志三河集日  
うちの黒井伊勢守はすこへはすよーのりへんりん  
ひあくまで伏見八里のよきよきのよきよきのよきよき

支那里

承久二年夏秋更 仲實相ト

おねするも月内夜の事さう時はかくいにまよひ

家集寧<sup>田中</sup>惠

原付

いづれ時とき、りうがまつてはせんをはせんをすらす  
家集寧<sup>田中</sup>惠

経因は御

は夜をとわねかずと塙窓はなまきすすら時ときの間ま

照てす

情

草花くさばなゆめうてゆうそらのあまはね<sup>はな</sup>ねのぬの日ひ

延長五年えんじょうご年とし一月

民部みんぶての家いえ

おれのまごとおやをこしゆく時ときにまき

序集

後宮粉横政

あ内うちの略りくの豊とよいはあくくすのあ内うちを月つきあ

荷衣

貞永七年じやうえいしびん行たどふ月つき荷衣判はいはんモニ家いえ

之明のめいも入角横政

経年

衣きら砧はてとよいとくとくのよのあめとくせうとく

後二位家いえを

うきの伊いの伊いの伊いの伊いわちわ一いやをとんがたの里さと衣きら

はの判はん右うの秋あきの、よこ一いあすくく各ごく

日

天あま御ごての家いえ

原家清

日

あはせをすむまつておぼれ内里ようすの衣  
龜山殿を訪へ河端持衣

事大通か氏因

月の主ある神なりありすらふをとわくをも

内

信實卿

衣きまゐるのとひ川十津川やりをもみ詠ひまつし

結清経百

少翁自作

泉河柳

中華歌舞集

三月の内柳いしらやくのとひ衣柳を

九月大納家柳を

新持衣

家長卿

あらぬの故柳にあはる衣柳やまつての衣柳  
かづく柳衣柳 袋裏柳大納

玉日柳よもせ砧柳すめり柳立柳ての衣柳

百丈柳

麻毛柳

志毛柳のめのとひ柳き毛柳のとひや衣柳と

家集柳中持衣

後庭家柳

有明八月柳まつての衣柳と枕柳まつて衣柳と

えまつて入角柳新持衣家舍持衣婦

内

せせよとまほつてうよとせりとよとてこの取衣

寛文七月柳て鶴柳 不中納家柳

衣柳ひまつてのとひひたる持衣柳と月柳陳柳

建保三年内裏御會用示持衣

内裏御の衣と寫て小國内さへは代てゆか

内

建久六年内たれ家秋内うの秋都

内

さわれ内内もししくり衣内と常林内のよもとくらん

内

さわれ内内もししくり衣内と常林内のよもとくらん

新立  
豫作

内内の所内いを内 王三位家内

内内の所内いを内 王三位家内

古内内のメキシ衣内のねあせ内やくうくつらのとく  
幸て持衣内 色毛内通三郎

三郎内の所内いを内 王三位家内

か衣内の所内いを内 王三位家内

康平六内十月家行内持衣

花園庄右衛門家内

内内の所内いを内 王三位家内

花園庄右衛門家内

か衣内の所内いを内 王三位家内

西治二内百内 二郎内達成

花園庄右衛門内の所内いを内 王三位家内

カ三郎庄右衛門内の所内いを内 王三位家内

後二位家内

せうとせうと内の所内いを内 又月内ともし衣内と

家集

後二位家内の所内いを内 王三位家内

卒内の所内いを内 王三位家内

後二位家内

もぬ内の所内いを内 王三位家内

永仁二内也忽内 王三位家内

永仁二内也忽内 王三位家内

夜内すと内の所内いを内 王三位家内

泰元二内百内持衣内

ちの月氣をすしと申すや承りま  
きまし偏る家事家事

前半切上

家家

臂下をさまでうれしきの夜ゆゆゆ

五日を百て

日

口ぬ衣へてうひまくらどんじよのをとさん  
負應三日百て博衣

氏郎んの家

近風をあひ候うにいしもくよあみさゆ  
松子

日

きよのまのぬ夜をとこ玉ひ／＼や承り  
文應元年七社と 日

木まつす人まどああす内ひよふら辰  
達長日百日行へ 徒二往行家

衣着用本

日

身ゆきとあけやくと拂ぬのととひまよ承りと  
おほせれ姓家

不入納取羽

日

松風のつまつてうれしきをとくせよかに承り也

立あひおもひゆくかへ 判子を家まつてこもく、あひをまことひく  
万葉といひりやもととくわくひよとくひも

家六で詩合の博衣 文爾家事又備指政

立あひおもひゆくかへ 判子を家まつてこもく、あひをまことひく  
万葉といひりやもととくわくひよとくひも

立あひおもひゆくかへ 判子を家まつてこもく、あひをまことひく  
万葉といひりやもととくわくひよとくひも

右毛馬は御内所の御用事とおもつてうるまに

日

三佐家

泊船川口せせらぎ月とどり秋の夜の

日

後庭家院へ

新宿の里の夜の衣をもじやひとあす

日

信實訓

御宿の夜の宿泊はすくしや衣と模の物

日

從三位乾家

多月也宿泊の内をかじ換の爲人衣にあり

日

六房内侍

家集

左京家久翁

新宿の里の夜の宿泊はすくし模の物（衣）

日

下郎

志き山くはまおれぬ乃精の衣にあり宿泊の

日

三佐家

浦吉毛ちむねかわいりさく里宿の夜の衣に

日

新宿家基氏

草木あじよそすやうゆのあくつりの衣に

日

中集奈持衣

新集奈持衣後鳥羽の御朝衣

日

後鳥羽御朝衣

未だせひうれり三番ノ里のあともあと衣に

日

五十音合集

中勢整之

事はとくにあつたる所の事もあらねり  
二夜百日はさう持衣 後宮お掃除  
じうじあるまへあと山をまわればよのあうけあと  
貞永百日はさう

支那事も又通掃除

ちゆうづきまははうとし明かく後よどすりと

延保三年四月大吉家百日寒持衣

大藏卿有家

在の内月がちうあひきのやまとあらわさ衣

己巳年百日

支那事も又通掃除

あくの馬やまきをかく塗まよへもあらひと  
五十日はさう

後二位家院

さの葉ともみはくあれよとくみこすやあらひと

本多院入通二位家院百日

帰途は仰

奈良乃家山へ

文治六年立社日是大吉之年

文ノ年

火のあいそりや衣山より下へ山へ里

本多院入通二位家院百日持衣

正三位家

秋はさう

あら河原、山を以て風の音をかか軍衣

貞應三年四月持衣 民部大河家

村山のまほ山へ里へとよとね山へ里へ

松原中

松大納通方

ありあり生田村内 今ノ月とえく衣ひあり

も着辛て内 往住家内

生田の村内 でねと内 うるさく

サトウモ持衣内

布内 の駄内 をよむ所内 生田の小屋内 いはり

家内 やきの野内 いはり衣内 草内 などり内 あやすん内

山内 うつみのよれ内 やうね内 とんび内 そとて内 衣内

素裸内 二三字内

民部内 てゐ家内

身内 ましくらあ内 おおはく内 くわら内 あまは衣内

貝鹿内 二三字内

内内 くわの衣内 あわのを内 いはりうつみ内 くわ

西園寺入道太政大臣家三千石

後九條大夫

吉野内 あらまの木内 かみ内 ときもく衣内 いはり

牛勢内 朝内 家内 す内 行内 持衣内

ス内 お内 う山内 の木内 の木内 たゞ誰内 うらわ衣内 いはり

柳本景供内 て

山内 く月内 うちきり内 林内 やうつ内 の男内 いはり

医内 一内 月内 あゆ内

サトウ持衣内

松原正明

そくくひの里内 秋内 すめう衣内 いはり

かうりぬまほの木内 うちわ内 おお月内 さき内 やまと

建長二年龜山殿五之三河過擦衣

後三位為繼也

里ノ今衣うつ一吉野近若故ノくとゆゆゆゆゆ

田防内侍

夜すゑ衣うつといも改乃へうとせと南あす  
は哥を歟とのくとす日つ不くとせ

類よとてうづとよどくと

河行あ時見

桺中細柳附

國流イ

御流

守よすみの御とくとく衣うつとゆゆゆゆゆ

五社百々

皇太后言玄後成

吹むうすひのゆれやまきみづの流衣川

志爾寧も又浦措殿等のとく人河過擦衣

市中納言家

千首子

民愁心家

門はくかまのくわくわくわくわくわくわく  
帖頭新古方文應元祐七社百々

門

新古方

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

新古方

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

新古方

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

正治二年百々

皇太后言玄後成

也

新古方

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

新古方

也

也

也

也

也

也

也

也

也

黒乃は下地場やまく水いとよま休ひて風か

建保元年四月十日行方

後三位範宗

都ノ木也をよりぬりの山ノ木也

千音萬行

後信源

志不思也秋之夜もくろれども筆也、木也

### 秋霜

建保二月裡十五日

僧正行意

急

さとすつゝとおも高松のからぬやま風葉

後三位範宗

山里もすらすらすま停ぬる高松の木のう

### 建長三年十月行方國家月

信實源

まかぬ子田とすとおも夜のとせやく木也

春事ニモ毎日さか

民部てお家

いふせんあと竹内林のそらにしきつけむる

秋霜似鬚年室長

千里

林の風が高きに我をもとめし事くもす

霜性木敷姜之草

口

もしもくともとあるのむらわすよめまくよわく

根の木を高めにすててからぬ事くもすけ

木子及すか能居すかく

せかく

墨年行景

日

根の木を高めにすててからぬ事くもすけ

木子及すか能居すかく

せかく

木子及すか能居すかく

能宣明

やと集

西洞陰百葉抄

後高野抄改

あゆよ夜の木ノ葉をもるれぬうづき

貞應三月朗詠百て一束林霜葉畫行

氏部つ家家

もすいらじ夜の木ノ葉をもるれぬうづき

嘉元年式取て朝モ家供千首うち野草や砂枯

みそりうせくのトモお枯くあめちひ色うもりく霜

口

万十

あ霜のをきメニ身秋風はくらはくらはくらはくら

不二い志

入れ

立

秋山立あすけたれい木もばりひまよわをらきや

首番行立秋霜立後高野抄改

あむす秋の木葉とらういのうのうむくわ

口

け橋承眼

色がくうせんも衣くはむきいす

口

秋乃空立秋乃空立秋乃空立秋霜立

後二位家音

あさくはくらうトアキリくいふかきねとくわやまく

口

留納モ空家

三三て林ね夏涼よあよじらわきまくは枯の竹

口

中宮持ち家房立

秋乃空立秋乃空立秋乃空立秋乃空立

口

年老は

すすりともよしむねうかよ重そく夜のうむく

口

はうた方立かようかよ右左店云處

子主病よおのとまくひうせ又云病あら  
とおのとよーうあと霜をえと  
判官縫合あらかのとよーうめきと

一言百々秋う

家中御空家

霜(シキ)自モ(シテ)もれ(シテ)りを(シテ)は  
ミ(シテ)ま(シテ)のあ(シテ)も(シテ)つれ(シテ)お(シテ)か(シテ)のあ(シテ)

葛

題不(シテ)

萬千  
萬(シテ)ま(シテ)のあ(シテ)も(シテ)れ(シテ)りを(シテ)は  
ミ(シテ)ま(シテ)のあ(シテ)も(シテ)れ(シテ)りを(シテ)は

家集

萬千  
萬(シテ)ま(シテ)のあ(シテ)も(シテ)れ(シテ)りを(シテ)は  
ミ(シテ)ま(シテ)のあ(シテ)も(シテ)れ(シテ)りを(シテ)は

建保ニ示家

前題意

小(シテ)み(シテ)のあ(シテ)も(シテ)れ(シテ)りを(シテ)は  
實(シテ)ニ(シテ)見(シテ)

一(シテ)も(シテ)のあ(シテ)も(シテ)の体(シテ)れ(シテ)る(シテ)月(シテ)

寒(シテ)中

二(シテ)寒(シテ)多(シテ)空(シテ)攝(シテ)

女(シテ)も(シテ)あ(シテ)也(シテ)も(シテ)て(シテ)ま(シテ)る(シテ)

家集

後題意

三(シテ)年(シテ)のま(シテ)と(シテ)す(シテ)萬(シテ)病(シテ)は(シテ)と(シテ)ま(シテ)る(シテ)

千五百畫行(シテ)判(シテ)、後(シテ)日(シテ)南(シテ)藝(シテ)

三(シテ)端(シテ)の里(シテ)と(シテ)す(シテ)と(シテ)ま(シテ)る(シテ)

承(シテ)後(シテ)日(シテ)と(シテ)す(シテ)

内

三(シテ)年(シテ)のま(シテ)と(シテ)す(シテ)萬(シテ)病(シテ)は(シテ)と(シテ)ま(シテ)る(シテ)

家集

和泉式部

松まよひくとよ

金とよ等にみる里

千五百畫行人

おとね夫良

ま萬よひくとよの

おとね夫良

建保三の春日

頃はたか

ましう山中

おとね夫良

是泰元年六月

よし

どうのよのやうすきよおとね夫良

おとね夫良

正治二の春

ほな家作

いづれすすめのまこと

おとね夫良

後霧捕改家作

日

まよひくとよのまよひく

松わら姑

寄風亭

猿金奈大

あつむのよつて秋月

よのり月

家集

ありと人

もよよきよか谷のよよよよよよよよよよよよ

おの内

題

よし

よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

おとね夫良

家作

よし

おとね夫良の葉よ

おとね夫良

建保二年四月家作

よし

信實翁

あきくさんとあさみのよしやうくとひらめく

八船類

衣笠内布

アリミナチのうそとせトのうそをも人喜

哥林花の舍守内惠

藤原憲經

ハのちつゝさばくき野のすがまのうをすすいはの内

寒うや波奈

原季成

人かのまよひとくもとづりあわせにゆき

くと

日

明称は節

かのとくすれのまもりと身ぢりとあれ  
寛和えひ内に事行ふ

板井義耕

おあきはむむとあもとあともあや

くと

主

万葉

あひきのとこなひとくとせひじきぬみ、ひむか、よ

題

日

不<sup>ト</sup>まきのありうおやうとくのゆくまや寒たほ

立長元を百てあ

後れ除因大ト

はゆりありうのよくとくをひすてあらへ、よあ

建久元正月

前中納言

まよひとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

家集秋立

社河

み家

書がまきとおもとせひとせひとせひとせひとせひとせ

豆とくか栗柄野葛

右承方

今あつてはひきよれりとおもひておもひて  
正月を月高處にて行へ故て云

大藏卿長房

あらまほのまくら、ゆめのくまよみみやびゆゑがく  
平貞時御下家三ミツノ人ミツノ相後恨ミツノ

桂傳之云謂

あらまほのまくら、ゆめのくまよみみやびゆゑがく  
家集ミツノ神ミツノよし、ゆくもミツノ、ミツノを池ミツノ下ミツノ家集ミツノ

家集秋ミツノ年

前大内氏

寄麻惠

後

源有重

かくの入等ミツノのまくら相ミツノてゆくもミツノを池ミツノ下ミツノ家集ミツノ

六帖題

之後御下

絆ミツノは吹上ミツノのまくら、ゆくもミツノを池ミツノ下ミツノ家集ミツノ

平安ミツノ古ミツノ御下

曰家

ちくとくミツノまくらの井ミツノの井ミツノとせくミツノうのえと

御集

謙全

人ミツノあをミツノ、ゆくもミツノとせくミツノの井ミツノとせくミツノうのえと  
まくらミツノまくらの井ミツノとせくミツノうのえと

葛

寛平ミツノ時ミツノ人ミツノ山ミツノのあせミツノ葛

もつまつとせくミツノまくらの井ミツノとせくミツノうのえと  
さのひろさとの萬

四

ひきくらひ一萬といふもの池内にとどき

じききの萬

内

教本解下 おもてたまに引ひ紫内にとけ川高

牟八とせば萬

内

御はせきくすうあみせうさん／＼萬とすかすか  
國のをはく萬とくはよ／＼萬の下ニ女神

きて見ひう

内

教本解下 犬のよとこも身からむりとせばくらひ

さくらい川乃萬

内

千鳥ゆ／＼のうとごくれ水茎きりてせば萬

和承吹の波乃萬

内

主とおとよあうとまくわらうとまくわらう

伊勢のほの萬

内

いそはくあんの萬とちのふくしまとくはくはの下を

あはくまく

内

三重のえびまかし三内のみまくすととまくまく

家集

大字伊勢

内

牟河乃よまよもと萬のれはせけくせよせよ

牟川行舟萬のれきよめりて立時やーと

あはくまくまく

内

牟九と萬の内、後三位を實

内

いそはくあくせのまくわむくわむくわくわくわく  
うくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

内

うくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

15

四

四

癸未十三日十月三日萬令

卷之六

十一

浪の北山の事あるのをあざるかとす  
大治二年八月廣田社行人判若基後  
君の名を身に抱内かうい  
判はんすまぐれの神かみやま色いろのくめ  
三事さんじねむと一いくもかうきとけりとく

文應元年七社  
集

民部考家

伊勢  
ゆすく、はあぬまの松代へもどる。義  
内  
ひさやかがゆく。道へあらわせにとづく。  
内

神山の葛の下れせんや  
わらせぬせとくせす  
萬花露水 一宇  
大藏御行 完成  
吉野へゆきお白葛の下りわらく  
後九除内有  
弘安元年一月  
日

和の事の本多と白萬  
柳本家供百  
其の内にいはるの事  
今萬事そし極やくもと  
ともあらんと萬事やうも安  
け玉と康保三年十月十七日内裏の文載人、主教を  
ゆの不祥の事とせりてつゝと申す萬事の主教

卷之二

家集萬宴の附

卷之二

身底

中

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

天慶<sub>年</sub>内裏<sub>御</sub>屏風

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

寛平<sub>吉</sub>附薦合哥

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

家集<sub>吉</sub>附薦合哥

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

業平<sub>御</sub>

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

陽成<sub>吉</sub>附薦合哥

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

伊勢

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

天慶<sub>吉</sub>附薦合哥

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

中勢

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

秋山<sub>吉</sub>

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

大貳<sub>高</sub>國

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

家集<sub>吉</sub>附薦合哥

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

松大浦<sub>長</sub>家

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

人<sub>吉</sub>附<sub>吉</sub>薦合哥

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

水洗<sub>吉</sub>飲其水<sub>吉</sub>

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

業善<sub>吉</sub>附<sub>吉</sub>政布<sub>吉</sub>七十賀屏風

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

内

ひだり薦むわくあくまをせとくへぬ

内

古文

かくやせんじておもひあまつておれ

家集仙家萬  
如常法所

水經注

ひまわりよしひかひくよ

永公正九月三并诗念慕

卷之三

かく絶えぬに、いとぞうじに、器の薫る。金背

卷之二

力東急達

不可定<sub>可</sub>中支女房<sub>トモ</sub>と云ふ事の如き

せじけんの  
一ノ  
田

原付正

内もおちのほかで、ゆきく決まりて仕事に當る。

卷之三

十一

卷之三

長承三正九月吉日  
邵濬之家行八月

孫少川集

まことにちつとけふ白薔薇たゞすすきの枝舟

此等半平基後云之。又山脈多有白菊。

のまくわくゆきさくわ

さすがに山の葡萄が甘いとおも  
うてゐるやうだ。山の葡萄が甘いとおも  
うてゐるやうだ。

の萬に文非俗境之萬く

卷之三

家集  
邵仲衡

家集南流集序

卷之三

やまくのける下の火をなべてひよとせん

中集五行はうす黃 後玄板攝政

秋の日ひじらひまづはく菊の桔梗へきくほひか

家集廿二年 藤原家隆

山のうねるてくねやかなきとそんちきくわ

文治二年百

前題 家

あいあいだりねのれよくじが下りぬひしも

文治二年九月雲母ち後藤行介菊

寒風は仰

枯木をばくさすとあやめあるのひくと菊の衣

残蕙をかじ事と 桜中納言頼人

士安宮

41.3

つむじに秋のこりて菊の衣よりて萬の衣

そと南て良く猪も 桜中納言頼人

ひねりおみし菊を候のうはまればほよまうす

家集廿二年

藤原家房

やく葉のえひ被をあすとやおひうそまくまびかく

家集廿二

あり上人

と秋よあひよとくのあひくにま、重の白菊

十題百々菊

後玄板攝政

谷川の岩はれまや候わとあまねほのゆふかもく

あふへどりのとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ナ特内

時あらねてと候ふもとけよとゆきよとゆきよとゆき

久安百々題百々菊

宗室大御製

星の夜をうつす萬のうららかにやわらかのひらひら

初霜の夜とふうりてとほんじうこゑた

伊勢い菊と作長亭 鴨長明

ねまくわす 痴のゆむ もじゆくとせよ あ菊の  
はまわすと さういふ まづのなまどくとく まきい  
のよけり 菊のゆめ せうと まひる このよけ  
わしきは にふせくわ

春夜入通ニシテ家幸て

正三位季任

△松風院題付

やくはのたゞとくかくせよ かのモエキに萬  
半九そ菊とす 徒ニ位を實

襢子内被玉家行八九月方

か賀左事

毛のよしとすと初霜のたけよせす而も萬  
久安百て

大根沙汰

毛くよしと萬のやと萬のじよをしむれとす  
百と菊と重

床をば

毛くよしと萬のやと萬のやとすとすとすとす

浦集

イギ

後風月行脚

もと田の少貫川がくともいにすと與る萬やとす

二階に大毒虫

アカリヒダ

毛やの黒とれと白萬のたかとすとすとすとす

家集

中納言當時

○書院後編  
吉慶集  
一月四日

余乃ひきかきくとま代えむし野上うのじつあし  
卒たて薦すや 徒三位為實

徒三位為實

主よ。お堂を。神やめや遠かりよ。萬もたらうりせは  
花めにて。一より。アマト。や。こ。さ。ま。じ。い。萬。れ。し。一。壁。の。ア  
を。す。や。し。が。原。の。萬。れ。い。う。と。わ。も。寺。と。と。そ。す。也  
メ。お。ア。ハ。ト。ミ。の。萬。れ。だ。の。色。よ。家。よ。か。く。ね。の。中。通。  
秋。里。あ。や。は。ま。く。と。三。ま。セ。く。わ。あ。ど。の。あ。う。色。づ。  
山。鳥。の。と。の。萬。れ。を。か。る。ま。わ。つ。よ。ラ。モ。ル。シ。  
わ。き。も。じ。の。器。の。萬。れ。に。付。り。あ。國。た。の。よ。ま  
十。キ。は。あ。四。ひ。ん。と。の。一。二。一。ま。や。わ。え。う。萬。れ。元。  
山。あ。わ。の。と。は。れ。よ。ま。す。や。カ。禪。ざ。り。ん。萬。れ。く。わ。す。り。  
日。き。よ。や。紅。葉。よ。う。く。山。の。す。の。力。を。と。ま。ゆ。ま。は。

日。あ。せ。く。故。て。く。し。後。や。お。く。く。称。を。あ。萬。れ。む。う。り。  
菊。生。き。て。ゆ。き。の。ひ。の。な。ま。宿。の。と。ま。  
日。が。ら。り。く。て。お。も。か。ま。を。も。う。日。高。ち。ま。萬。れ。枝。行。て。  
日。よ。り。て。え。き。と。ま。く。お。だ。う。日。手。く。や。ち。ん。秋。乃。の。な。  
木。す。く。や。梅。柳。よ。く。か。め。り。日。手。く。や。ち。ん。秋。か。く。や。ま。く。か。氣。内。  
日。と。ま。す。内。の。お。き。か。く。り。日。萬。れ。い。け。高。の。内。日。  
日。推。一。あ。も。お。う。れ。岩。よ。ひ。く。き。け。白。萬。れ。衣。内。  
日。杜。れ。く。て。神。や。か。く。と。ま。万。れ。つ。ま。き。之。内。  
日。と。す。ふ。と。へ。く。萬。れ。や。か。く。と。ま。万。れ。つ。ま。き。之。内。  
之。を。れ。入。萬。れ。お。證。主。家。事。す。残。萬。れ。

某。お。う。と。も。う。じ。つ。林。よ。ひ。か。志。不。あ。夜。す。く。萬。

徒三位範宗

徒三位範宗

永久二酉大神 宣祐正月人萬

卷之三

内侍（うちわらわうど）（うちわらわうど）の事。内侍の事。

主基方內屏內

市中綱 医房

寫川原山風  
四  
羊

卷之三

卷之三

水久留  
日記  
九月九日

中華書局影印

壬午歲次癸卯仲夏  
寃居元年九月  
內侍郎重陽宴

寃居元年九月內嘗辱以重陽宴

卷之三

室門側に各財主の御用印にて記す。大字は  
篠中納四面で各社の明治元年より開き  
トし其意ニテ九重ノニナ  
トシテ御名トガハシヘシ  
可

卷之三

百丈山中觀雲雨

百  
可

卷之三

寶治二年正月廿三日重陽宴

12  
宴

卷之三

四

九

氏家文庫

後成文

人ハサウエのもせぬ私ハシマムのすせとくら萬円内

内

後二位頼氏ハサウエ

仙人ハサウエの富ハシマムとせの跡ハシマツと私ハシマムと忘ハシマツと遺ハシマツと内

内

信實ハサウエ

通ハサウエあハサウエの通ハサウエの萬ハシマムと内ハシマツと内ハシマツと

内

後高義捕政

吉野ハサウエのハサウエの内ハシマツと内ハシマツと内ハシマツと

千五百萬行ハサウエ

第三内ハシマツ

廿五人ハサウエあはらひハサウエ一山海ハサウエの萬ハシマム代ハシマツ内ハシマツと

夏ハサウエ宴遊

慈慎ハサウエ

祖ハサウエのハサウエとハサウエと早ハサウエるやハサウエすハサウエすハサウエ白萬ハシマム元

正治二年夏ハサウエ

内

ち萬ハシマムの萬ハシマムみゆかうすをとそのをとく

文治六ハサウエ五社ハサウエ

是大后ハサウエ主ハサウエを人ハサウエ成ハサウエ

三ハサウエキハサウエのあらハサウエきハサウエ萬ハシマムりやハサウエ不ハサウエれハサウエの行ハサウエきハサウエ

門ハサウエ林ハサウエのハサウエとハサウエ言ハサウエせハサウエの是ハサウエすハサウエいハサウエ萬ハシマムの行ハサウエきハサウエ

住ハサウエ行ハサウエきハサウエもハサウエのこハサウエくハサウエの是ハサウエすハサウエいハサウエ萬ハシマムの行ハサウエきハサウエ

山行ハサウエ残萬ハシマム

檀酒實家ハサウエ

行ハサウエおほひハサウエ乗ハサウエおほううすハサウエ行ハサウエきハサウエすハサウエけ

百ハサウエ度ハサウエ

順酒ハサウエ行ハサウエ製ハサウエ

行ハサウエおほひハサウエ乗ハサウエおほううすハサウエ行ハサウエきハサウエすハサウエけ

内

寂空室ハサウエ行ハサウエ止障ハサウエ

後二位家ハサウエ應

山風のとよよたきこゑのせんせきの宿の夜や 菖

内

大藏印有家

翁せの身うらしきト言せ川せまつる夜の草下の

後成てや

此鳥雨夜聲吹て仙出さ

童心未盡ニあり

西亭枕上甜不寐

逢りかし人情未解

不復同了徳華在焉の五萬

教故にして

固自吟唱を稱

此食始末記述之奉人少能

すとひれ氣の樂く主はり

匱衣えひゆけ入肉は屏内

市中御官家

通すに物を賣せ水と

何多量に則れ

引取組とらへし七日

以後三日後よりあり

朗詠配細言

策使花月下流

而浮上再共仰生家地脈

食日精明年解者也

同前

之はあくの二月もしまみよにて草の元をうらや

達保て年百

内

矣ありくらうそくやに草の元のちがむる空を

家集めの

内

じとあすとすこしのいとまのいとまのいとまの

裏裏

内

家集めの

内

まくまくすこしのいとまのいとまのいとまの

裏裏

内

家集めの

内

わざわざすこしのいとまのいとまのいとまの

裏裏

内

松中印石雄

内

六帖類

測古

信實附下

卷二十一

新之六  
内新一八日  
翠葉の葉を落葉せたる處をもてて其の葉を取る  
内

秋之叶

内  
木の葉を落葉せたる處をもてて其の葉を取る  
内

建長八年正月詩行庄行家

木の葉を落葉せたる處をもてて其の葉を取る  
内

元林花序、萬

清情附下

木の葉を落葉せたる處をもてて其の葉を取る  
内

楊過萬と

除祐附下

木の葉を落葉せたる處をもてて其の葉を取る  
内

家  
木の葉を落葉せたる處をもてて其の葉を取る  
内

萬とよむる

は伊云誉

萬とよむる  
萬とよむる

内

萬とよむる  
萬とよむる

はのちを御附下  
萬とよむる

内  
萬とよむる  
萬とよむる

正治二年正月  
万大河本良

萬とよむる  
萬とよむる

秋水

建保二年正月十日詩行庄秋水

第廿四

林のうち處へよきとすまよ  
日山のふくわまむれおおひるやくと  
内

赤穂雅経人

寛永十二年  
いは牛極今

重光、長二、吉高

